

令和 2年 ほくぎん若手研究者助成金 研究実績報告書

氏名	所属・職名	助成金額
藪谷 祐介	富山大学学術研究部芸術文化学系・講師	750,000 円
研究課題名	団地集約化におけるコミュニティデザイン手法開発に向けた基礎研究	
研究の概要	<p>本研究は、これまでに集約化が完了した公的集合住宅団地を調査対象に、集約化の方法と課題、集約化によってコミュニティに与えた影響を明らかにすることで、団地集約化におけるコミュニティデザインの手法開発に向けた基礎的知見を得ることを目的とした。調査方法は、①団地を管理する UR 都市機構担当者へのヒアリング、②団地自治会へのヒアリング、③現地調査を予定していたが、新型コロナウイルス感染症の影響により、②と③は実施できなかった。そのため、集約化が予定されている団地居住者を対象に、新型コロナウイルス感染症が蔓延する以前に実施したアンケート調査の分析・考察を行い、団地集約化におけるコミュニティデザインの手法開発に向けた基礎的知見を得ることとした。</p>	
研究の成果	<p>・集約化事業の内容と集約化によるコミュニティへの影響について</p> <p>集約化がすでに完了した A 団地の UR 都市機構担当者にヒアリング調査を行った結果、以下のことが明らかとなった。団地集約化の背景としては、まちの重要な位置にありながら住宅機能に特化しており、今後、少子高齢化が進んでいく中でまちや団地に必要となる機能がないこと、今後の人口減少時代を見据えると将来的に現在の需要水準が見込めないという 2 点が挙げられた。集約化にあたっては、病院を誘致し、一部を既存建物を残したまま譲渡した。団地居住者への説明や合意形成方法については、事業着手前に全体で 2 回、個別説明会土日・金土の 2 週に渡って計 4 回、さらに数回のワークショップ、自治会の勉強会、着手説明会等を実施した。移転反対者はいたが、時間をかけて交渉し説得した。集約化過程においてコミュニティに配慮したこととしては、居住者が実施していたコミュニティ活動の支援を行ったことが挙げられた。このように団地居住者のニーズを把握し、それを支援することが集約化を円滑に進めていく上で重要であると考えられる。ただし、A 団地については、自治会と集約化について非常に長い間話し合いを進めていたため、そのころも比較的円滑に集約化を進められた要因であると考えられる。今後、集約化を進めていくときの要点としては、居住者全員の意見を聞いた上で実施することが挙げられた。</p> <p>・集約化計画団地居住者に対するアンケート調査分析</p> <p>集約化が予定されている B 団地全居住者に対し、アンケート調査を実施した。その結果を用いて、団地居住者の地域活動への参加状況と参加意向を整理することで類型化し、各類型ごとの居住者特性と地域活動に参加しやすくなる条件を明らかにした。これまで地域活動へ積極的に参加し、今後も参加したいと考えている「Ⅰ.継続参加型」は、夫婦で暮らす定年退職後の高齢者に多く、継続的な参加を促すためには楽しく、知識や技術が習得できる内容の活動や人との交流の機会を用意すること参加しやす</p>	

	<p>い条件となる。これまで地域活動に参加していないが今後参加したいと考えている「Ⅱ.参加意向型」は、あと数年で定年を迎える、あるいは入居年数の短い単身居住者が多く、活動内容や交流の機会が参加を促すため、居住者のニーズを適切に把握し、それに応じた活動内容を企画することが参加しやすい条件となる。活動に参加したくない、あるいはできないと考えている「Ⅲ.不参加型」は、仕事をしていて時間的理由により参加できないあるいは身体的理由により参加できない居住者が多く、時間的理由によって参加したくない居住者に対しては、まずは公平性のある仕組みのもとで、小さな負担で参加できる活動を企画することが参加条件となる。</p> <p>このように団地居住者の特性に応じて参加条件を明らかにしたことは、今後集約化が予定されている団地居住者が主体的に多くの居住者を巻き込みながら地域活動を活性化させていく上で、また専門家による支援方策を検討する上で有効な知見になる。</p>		
<p>研究成果発表状況</p>	<p>現在、国際学会誌へ論文投稿準備中である。</p>		
<p>経費の執行状況</p>	<p>区分</p>	<p>執行額(円)</p>	<p>備考</p>
	<p>研究補助謝金</p>	<p>103,500</p>	
	<p>物品(備品)</p>	<p>414,590</p>	
	<p>物品(消耗品)</p>	<p>21,319</p>	
	<p>学会参加費</p>	<p>4,000</p>	
	<p>英文校正委費</p>	<p>206,591</p>	